

## テレビドラマ「御上先生」

夜の連続ドラマなどほとんど見ないが、TBS系日曜劇場「御上先生」にはまりかけている。御上先生を演じるのは松坂桃季、2014年から始まったNHK大河ドラマ「軍師官兵衛」で、不運の戦国武将と言われた「黒田官兵衛」を演じていたのによく覚えている。この大河ドラマはよく観た。戦国武将の中では、「流れる水に文字を描くような、そんな愚かな人生であつた。」と自らの人生を語った黒田官兵衛は私が最もお気に入りの戦国武将だからである。ちなみに歴史に詳しい小林校長は、歴史上の人物では坂本龍馬だが、武将では「加賀百万石の祖」と言われた前田利家のような。流石に視点が違う。(微笑)

ドラマ「御上先生」の舞台は学園モノだが、「ドラゴン桜」と違ってやや異色と言ってもいい。ドラゴン桜で登場した高校生は東大進学を目指す受験生ではあったが、学力偏差値がずば抜けていたわけではない普通の高校生であった。御上先生に登場する高校生はみな頭脳明晰であり、国家公務員試験を突破し国家官僚を目指すわゆるエリートである。冷静に自己主張も議論もできる高校生、人に媚びず相手を受け止めたり受け流したりする聰明さも持ち合わせている。御上先生は事実上の左遷で、民間への官僚派遣制度にて文科省から私立進学校へ教師として赴任した。制度の存在は知っていたが、学校現場への派遣は現実にあるのだろうか?。とは言え御上先生が左遷を受け入れたのは、文科官僚として真の教育改革を願っていたし、日本の教育そのものに疑念や怒りを抱きつつも、絶望はしていなかつたことは、文化祭で教科書検定をテーマにした内容にも表れている。番組で印象的なのは、高校生と御上先生の日常会話や指導がひとつひとつ説得力があるように感じることだ。その高校生に対峙する御上先生は、冷徹だが冷酷ではなく、情操教育の本来の在り方を示唆してくれているかも知れない。

世評ではドラマ「御上先生」は、官僚教師が腐った権力へ立ち向かい、令和の18歳の高校生を導く大逆転教育再生ストーリーと言われている。ドラマが今後どう展開されていくのは分からぬが、ストーリーの最後のどんでん返しは、文部官僚が隠しがっている文科省の闇の真実が明らかにされるようだと誰かが言っていた。

久しぶりの社会派ドラマに期待感も大きい。権力と教育の癒着にせまる文科官僚による「眞のエリート改革」の行方は、ビデオ録画を忘れず最後まで観たいと思う。

ふと、あの教育評論家の尾木ママは、このドラマをどう評価するのだろうかと聞きたくなつた。

(丹羽 豊)